四国大学学際融合研究所年報　第４号　59－68（2023）

保育者経験を生かした絵本づくり
－長谷川摂子と柴田愛子の場合－

米 村 佳 樹

Creations of Picture Books by utilizing Experiences as a Child Care Worker: Cases of Setsuko Hasegawa and Aiko Shibata

Yoshiki YONEMURA

抄　　録

この論文は長谷川摂子と柴田愛子が保育者経験を生かしてどのように絵本を作っているのかを明らかにすることを目的としている。研究の結果，以下のことが明らかになった。長谷川摂子は，保育よりも子どもに興味をもって，保育者になった。彼女は「子ども内の自然」に感銘して，水や草花のような身近な自然をテーマにした絵本を作った。また，彼女は子どもたちが喜ぶ音やリズムのある絵本を出版した。柴田愛子は大人の理想を押しつける保育に反対し，子ども中心の保育を実践した。彼女は，子どもの自己発達力を信じ，子どもの気持ちを寄り添うように努めた。彼女の絵本は，彼女のこうした保育観を強く反映している。

キーワード：長谷川摂子，柴田愛子，絵本，保育者経験，読み聞かせ

Ⅰ．はじめに

子どもたちを魅了する楽しい絵本。そうした絵本を，保育者経験を生かして作ってきた絵本作家の中に，中川李枝子や村山桂子，長谷川摂子，中川ひろたか，柴田愛子などがいる。彼らは，絵ではなく文章と物語の展開を担当している。絵本づくりにおいて保育者である強みは，書く対象がはっきりしていること，絵本のテーマや素材が身近にあること，子どもの発達や興味を理解していること，絵本を日常保育に活用していること，子どもの心になれることなどが指摘される。村山桂子は，『たろうのばけつ』『たろうのおでかけ』『たろうのともだち』（堀内誠一・絵，福音館書店）といった絵本を，「幼稚園の先生をしていたからできた絵本」「子どもたちの力を借りて，子どもといっしょに作った絵本」と表現している。[1)]

本稿の目的は，『めっきらもっきら　どおんどん』（長谷川摂子・文，降矢奈々・絵，福音館書店）『けんかのきもち』（柴田愛子・文，伊藤秀男・絵，ポプラ社）といった絵本で知られる長谷川摂子と柴田愛子を取上げ，彼女らがどのように保育者経験を生かして絵本を創作しているか，について，彼女らの絵本や言説の分析を通して解明することである。これまで長谷川摂子と柴田愛子の絵本について保育者経験を生かしたという視点から考察した研究はない。以下，長谷川摂子と柴田愛子が，どのように保育者への道を歩み，どのような保育経験をしたか，特にそこで何を学び，あるいは大事にしていたか，そして，それをどのように絵本づくりに生かしているかについて明らかにしたい。

Ⅱ．長谷川摂子の保育者経験と絵本づくり

１．保育者への道

東京大学大学院でフランス哲学を学んでいた長谷川摂子が保育所の保育士になったのはなぜか。彼女によれば，1968年当時，「学園闘争という時代の渦中にあって，私の中にもアカデミズムへの反発が生まれていたからです。研究室に入るのではなく，生

身の人間に触れ合いたい。そして迷った末に，人間として一番“いきのいい”人たちである，幼児の世界につきあってみたいと考えた」[2] からである。

哲学者モンテーニュの本や仏語辞典の暗い森から飛び出して，[3] 彼女が触れ合いたいと考えた，その生身の人間は幼い子どもであったが，その子どもとの出会いについて，彼女は次のように述べている。「ある日，本に向かうのに疲れてふらりと外に出ると，狭い路地で子どもたちがあそんでいた。わたしは何の気なしに子どもに声かけた。うまくはずみがついて気がついてみたら，わたしは子どもと一緒にしゃがみこんで，子どもにお話をしてやっていた。（中略）子どもは食いるような目でわたしの話を聞いてくれた。わたしはすっかりうれしくなり，心うきうき，自分の部屋に帰っていった。それから，勉強にあきると外に出て子どもとあそんだり，お話をしたりした。（中略）子どもって好きだな，いいな，性に合うな，と思ったのはきっとこのときに違いない」。[4]

このように生身の人間である子どもとの出会い，お話をしたり，一緒に遊んだりする中で，子ども好きな自分を再発見して，長谷川摂子は保育士になろうと決心した。彼女は，「その時の何とも言えない晴れやかな気分は忘れられない」と語る。[5]

こうしたピチピチとした生身の子どもが元気に生きている所に行きたいという熱い思いとは別に，高校生の時にみんなで勉強した教育基本法に感動し，日本の未来を担う幼い子どもを個人として尊重し，豊かな個性を育てる教育はいい仕事だと観念的に思い込んでいたことも影響した。[6]

2．保育者としての経験

1）「子どもの内なる自然」の発見

大学院を中退した長谷川摂子は保育士資格試験に合格し，1971年４月に公立保育園に勤務した。その６年間の保育士生活で110名余りの子どもを担任した。彼女は，子どもたちとの思い出を「この世の人間模様としかいいようのない彩りや明暗をもって迫ってくる」と表現し，「一人ひとり，これはもう押しも押されもしない人間で，自分のめぐり合わせのなかで一生懸命に生きていた」[7] と述懐している。

保育士として働き，結婚して子どもも生まれたが，長谷川は子どもたちを見ていると，「暮らしがリアリティをもつようになり，学生時代には興味のなかった道ばたの木や花にも目をとめるようになった」[8] という。彼女が自然に興味をもつようになったのはなぜか。それは，子どもたちと一緒に暮らす中で，「子どもの内なる自然」を発見したからであった。彼女は言う，「生命あるものへのやみがたい関心，それこそ子どもたちの本領だ。保育士をしていた頃，入園したばかりで泣きわめいている子どもを黙らせるには，その子を抱いて鶏小屋の前に行くのがいちばんだった。とにかく動物や昆虫に注がれる子どもの生き生きとしていること。とびきりの親愛の情と好奇心の深さは，大人になれしまった私たちには，どこか手に届かない謎めいたところがある。（中略）ただひたすら生へ，生へと，太陽に向かうように成長していこうとする子どもは，ありとあらゆる動物たちと同じ，自然の命の輝きをもっている」[9] と。こうした「子どもの内なる自然」を体験した長谷川は，後述するように，子どもたちに身近な自然をテーマにした絵本を作っている。

三人目の子どもが生まれ，彼女は保育士と子育ての両立が困難になって退職したが，その後も「絵本の読み家」として自宅におはなしクラブ「赤門こども文庫」を開設するとともに，保育園や小学校に出かけ，読み聞かせを続けた。[10]

2）絵本との出会い

ペーパーテストで保育士資格をとり，保育実習もせずにいきなり公立保育園の保育士（４歳児24名担当）になったものの，その無謀さに気づいたときはもう手遅れであった。最初は言葉かけもぎこちなく，足が震えたという。[11] 彼女はその時の心細い気持ちを次のように述懐している。「経験皆無の私にできることは絵本や紙芝居をよむことぐらいのもの，それが終わればあとは散歩に出るしかない。雨でも降れば泣きたくなるようだった」。[12] 彼女を悩ませたのは，子どもの人格を尊重しなければと固く信じていたこともあって，子どもを叱ることが出来なかったことであった。その結果，「私にとってそれぞれ

の子どもの魅力は汲めども尽きぬものだったが，クラスはてんでんばらばらだった」[13] という。

ロクに保育技術を持たない新米保育士の長谷川摂子は，藁をもすがる思いで活用したのが絵本であった。彼女は述べる，「子どもたちが絵本を静かに聞いてくれたときの安堵感はいい知れません。絵本は，私と子どもたちをとにかくつないでくれる架け橋になった。私は子どもといっしょに，ひたすら喜びを求めて，手当たりしだいに読みました。子どもとひとつになって楽しめることがあるということで，なんとか救われたのです」[14] と。子どもとの出会いと同時に得られた絵本との出会いは，彼女にとって貴重な体験であった。「わたしは耳をそばだてる子どもたちの前で絵本の言葉を声にしながら，この絵本に今，生命を吹き込んでいるのはわたしだという，今まで感じたことのない自負と喜びに満たされた。それは解放感というにふさわしい晴れやかな楽しさだった」。[15]

彼女が楽しみという唯一の尺度で選択して，子どもたちと喜びを分かち合った絵本は，『いたずらきかんしゃちゅうちゅう』（バージニア・リー・バートン，福音館書店）や『てぶくろ』（エウゲーニー・M. ラチョフ，福音館書店），『マドレーヌ』（福音館書店）のシリーズなどであった。[16] 長谷川は，読み聞かせの極意について，次のように語っている。「大切なのはどう読むかではなく，読み手も聞き手も物語の中に入って，物語の起伏に身を任せて自分を解放すること。つまり楽しむことだと思います」。[17] このように彼女にとって絵本の選択と絵本の読み聞かせにおいて大切にしていたのは楽しみ，楽しさであった。それゆえ，彼女は，「おもしろい，楽しい」を基本にして絵本を作った。[18]

3．絵本の創作

長谷川摂子は，彼女が保育者として経験した「子どもの内なる自然」と「おもしろい，楽しい」を基調にして，以下のような絵本を作った。

1）『ぐやんよやん』

彼女は，赤ちゃんの笑いはどこから来るか，という問いに対して，「単調なリズムが突如，変化すると笑いがこみあげるらしい」と答える。いわゆる気抜け笑いである。実際，彼女が保育園で働いていた時，それを経験した。「子どもがブランコを揺すってやっていて，そのことがはっきりわかりました。ゆらゆらゆら，ゆーらゆら，揺れの強弱をつけると，急に強くなったとき，笑うんです」。[19]

そこで，その経験を生かし，「人生でいちばん言葉の音やリズムに敏感」[20] な年少児を対象に気抜け笑いをつかった絵本『ぐやん　よやん』（ながさわまさこ絵，こどものとも年少版第267号，福音館書店，1999年）を作った。この作品では，「ほんやーぞぞぞぞ　びーん」「じんじ　じんじずー」「ばあ　ばあ　あっぱっぱ」「じーやや　じーやや　ぽー」といった意味のない言葉にリズムと抑揚を自由自在に付けて楽しめるようにしている。長谷川は，絵本を読んで，「うまく子どもが笑ってくれると，ほんとうにうれしい」[21] と述べる。赤ちゃんの絵本として出版された『めんめん　ばあ』（柳生弦一郎・絵，福音館書店，2006年）も，「いないいないばあ」のように，弱，弱…強のリズムを活用した作品になっている。

2）『きょだいな　きょだいな』

長谷川摂子によれば，保育園に勤めていたころ，野猿のような，元気な子どもに手を焼き，「そんな男の子をどう絵本の世界に連れていくか」ということが，いつも彼女の頭にあったという。彼女が，彼らに立てた一番の作戦は，「声を出すこと，歌うこと」[22] であった。

彼女が作った絵本『きょだいな　きょだいな』（降矢なな絵，福音館書店，1994 年」にも，そういう思いが込められている。彼女は，「『あったとさ，あったとさ』と歌いこんで，あいつらをのせてやる，という下心がった」[23] と告白している。実際，この絵本では，「あったとさ　あったとさ」といったリズミカルな言葉の繰り返しとともに，広い野原のど真ん中にいきなり巨大なピアノ，石鹸，電話，トイレットペーパー，瓶，桃，泡立て器，扇風機がつぎつぎとガーンととび出して来て，子どもたちを遊びの世界に誘う。やって来た100

人の子どもたちが，底抜けにめちゃくちゃに遊ぶ場面が展開する。

長谷川は，「この世ならぬ世界の扉を叩くノックの音」であるかのような，昔話にある「あったにんがな」「昔，あったとさ」の言葉と同じく，「『あったとさ』という言葉にも，現実を超えたとんでもないものを招きよせる不思議な力があるかもしれません」と語る。とにかく，彼女は，この絵本を通して，子どもたちに「底抜けになって，めちゃくちゃに遊ぶ解放感」[24] を届けることを願った。彼女によれば，「この解放感と喜びに包まれてこそ，子どもは身をのり出して学び，考え，その体験を心と身体に深く刻み込んで，生きていく上での力と自信を得る」[25] という。

3）『みず』

長谷川摂子は，「私とは違った目，違った感性をもつ人間」である子どもと生活する中で，子どもが何に興味をもち，何を考えているか，どんな人間なのか，と好奇心を抱いていた。[26] 彼女が水をテーマにした絵本を作ったのも，保育士をしていた時に，子どもは自然の中で水が大好きであることを発見したからであった。彼女は，次のようなエピソードを語る。「私が以前保育士をしていたころ，さんざん悩まされたのが水。特に三歳くらいまでの子どもに水を触らせると，いつまでも飽きずに遊んでいて，びしょぬれになっても，なかなかやめないので困りました。自然をテーマにした科学絵本にしようと考えたとき，子どもが自然の中で一番好きなものは水だ，と思ったんです」[27] と。

長谷川は，こうした保育者経験を生かして，子どもたちにとって何よりも魅力的な対象である「みず」をテーマにした絵本『みず』（長谷川摂子文・英伸三写真，福音館書店）をつくることにした。保育士であった彼女には一つのこだわりがあった。すなわち，客観的な対象とした水ではなく，子どもが触って気持ちのよいと感じる水を絵本にした。そこには，「感覚の喜びをたくさん経験することが，自然への関心や興味といったものの最初の土台となるのでは」という彼女の漠然とした予感があつた。[28]『みず』では，雨上がりの庭にある蜘蛛の巣に付着した雨粒，浮いたりもぐったりできるプール，水鉄砲の水，広い海で打ち寄せる波，軒下に垂れる氷柱など，子どもたちはいろんな時，いろんな所のいろんなみずの感じ，「生きている感じ」[29] を全身で体験する。

4）『うーらうららはるまつり：くさばなおみせやさんごっこ』

長谷川摂子は子どもと暮すようになって，身近な自然に興味を持ち，子どものように草花をキョロキョロと見て歩き，それらの名まえを知りたくなった。草花たちとなつかしい再会をはたした彼女は，草花あそびの絵本『うーらうららはるまつりーくさばなおみせやさんごっこ』（長谷川摂子文・沼野正子絵，月刊『かがくのとも』通巻第302号，福音館書店，1994年5月）を作ることになった。彼女は，絵本を作るのにあたって，次のように述べている。「遊ぶことが天から与えられた子どもの仕事なのです。その仕事にちょっぴり協力するのが私たちの仕事。何よりも遊びの楽しさがいちばんの絵本を作りたいと思いました」。[30]

絵本づくりの準備として，いろいろな保育園や野原に取材に行っている。テーマは，草花あそびを通して，「春の草花の色，におい，感触を楽しみながら，子どもたちの新しい発見の目と，創意工夫の眼」を育てることである。話の舞台は，山のふもとにある「どんぐりえん」。「どんぐりえん」には15人の子どもたちと二人の先生がいる。おばちゃん先生はいつも歌みたいなおしゃべりをする。「うーら　うららと　いいてんき，せかいじゅう　はる　はる　はるうーっ」。すると，園児のゆうこが「ねえ　せんせい，はるのおまつりしない？」という。ゆうこの提案により，春のおまつり「くさばなおもせやさんごっこ」が始まる。最後の頁には，全国の幼稚園や保育所の子どもたちが草花遊びを楽しめるように，「おまつりじゅんび・つくりかた・あそびかた」が掲載されている。具体的には，「おしゃれのみせ」に並べるネックレスや花かんむり，はなかんざし，ゆびわなどの作り方，「おすしや」に並べる，ちらしずし，て

まきずし，にぎりずしの作り方が詳しく図示されている。

なお，「いろんな　きのみ　いろんな　きのみ　いろんな　えだ　いろんなやさい　じっと　みていると　なにか　できそう。おもしろもの　いっぱい　できそう。」といった文章に表現されているように，「つくる・あそぶ・生きる」をテーマにした『ひらひらころころあきまつり：くさばなおみせやさんごっこ』(長谷川摂子文･沼野正子絵，月刊『かがくのとも』通巻第318号，福音館書店，1995年９月）が姉妹編として出版されている。

Ⅲ．柴田愛子の保育者経験と絵本づくり

１．保育者への道

柴田愛子が，子どもと関わる仕事に関心を抱いた背景には，幼稚園みたいな家と子どもの出会いがあった。五人きょうだいの末っ子の愛子は，二人の兄と二人の姉と一緒に幼稚園に通わず自宅で，結婚当初に幼稚園教諭をしていた母親に育てられた。「広くはないが庭があり，砂場と池，近所のおじさんが作ってくれたブランコまであった」[31]という。また，同居していた姉夫婦に子どもが生まれ，初めて間近で赤ちゃんの姿を見て，心を奪われた。「なんて，おもしろい存在だろう。一週間，一カ月，短期間で赤ちゃんはみるみる変化していく。だれも教えていないのに，寝返りをし，はいはいをするようになる。なにかができるようになるたびに，涙が出る感激を覚えた。この姿をずっと見ていたい。（中略）家の中に小さな生き物，子どもがいるって本当にすばらしい。将来は子どもに関わる仕事，幼稚園の先生になりたい，と思うようになった」。[32]

1972年に幼稚園教諭養成学校を卒業して，東京都内の私立幼稚園に就職した柴田は，そこで，笛の音で子どもたちを動かしたり，無理に楽器を覚えさせたりする園の保育を目の当たりにして，「どうも大人の理想を子どもに押しつけている」気がして，４年後に園を退職した。一般企業でOLの仕事をしたが，子どもたちとの楽しい日々が忘れられず，一年後，別の私立幼稚園に再就職した。その園では障害のある子どもと過ごし，子どもは一人ひとり違うこと，大人はその一人ひとりの子どもにもっと寄り添うべきであることに気づいた。再就職した園も，クラス担任として36人の子ども相手に全力で向き合ったが，心身ともに燃え尽き，５年後に職を辞した。[33]

離職後も通い続けていた「子どもとつくる生活文化研究会」の仲間から提案されて，柴田は34歳になった1982年に３人仲間といっしょに木造家屋の「りんごの木」子どもクラブを始めた。今度は，一人ひとりの子どもとじっくりゆったり向き合うことにした。木造家屋にしたのは，家みたいな場所の方が幼い子どもたちは落ち着くのではという考えからであった。[34]「りんごの木」は，子どもたちがやりたいことを実現する場所として，子どもと遊ぶ「秘密の時間」（中川ひろたか，後に絵本作家となる）と，「造形教室」（齋藤雅美），そして柴田が担当した「幼児保育」から構成されていた。彼女が「りんごの木」を創設したのは，これまでの保育への反省があった。つまり，おとなの意見ばかりを聞き，子どもを見失い，子どものことを知らずに保育してきた自分がいた。試行錯誤の末にたどりついたのが，「子どもをよく見る」「子どものことは子どもに聞く」という保育の原点であった。[35]

２．「りんごの木」における保育

「りんごの木」では，幼稚園教育要領の「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」に見られるような，大人の理想を押し付ける「どう，育てたいか」ではなく，子どもの視点に立ち，「子どもの心に寄り添う」を基本姿勢にし，子どもを主役にした保育を実践することにした。[36] 柴田愛子にとって，子どもの心に寄り添うとは，「その子の表情から読み取って，恐らくこう思っているのではないかということ」[37] を言葉にしてみることである。子どもが痛がっている時は「痛いね，痛かったね」，面白く遊んでいる時には「面白いね」と言ってあげる。それだけである。

柴田愛子は子どもをじっくり見つめ，子どもの気持ちに添うことを通して，子どもの面白さに気づくとともに，子どもは自ら育つ力を持つことを確信した。彼女は言う，「子どもは自分の発達にあった遊びを見つけるのがすごくうまい。そして，その遊び

をすることで，自分を伸ばしたいと無意識に思っている力を伸ばしていく」[38] と。彼女によれば，「保育とは大人が先に立って子どもを導いていくことではなかったの。むしろ子どもの後ろにいて，子ども自身が進みたい道を進めるよう，援助すること」[39] である。

こうした保育観に立って，彼女は，子どもの気持ちを察知し，その気持ちを口に出しながら，その育ちを援助することを心掛けている。[40] 彼女は，原点に立ち返って，子どもの側からの発達が見えてくると，保育の奥深さに気づくとともに，保育の面白さに夢中になったと語る。[41]

注目されるのは，柴田愛子は束縛されずに自由な保育を続けたいという気持ちから，自治体から補助金を受けていないことである。[42] 彼女は，胸に秘めた保育への熱い思いを次にように述べる。「私たちの仕事は，子どもの心のふるさとをつくることだと思っています。長い人生，そりゃしんどいこともあるわよ。そういうとき，人に大切にしてもらったこと，じぶんらしくあったことを思い出して，力をくれるような場所になりたいの」。[43]

3．保育者経験を生かした絵本づくり

柴田愛子は，「りんごの木」における保育者としての経験を生かし，子どもたちの「ほんとう」の姿を描いた「あそび島」シリーズの絵本（ポプラ社）を制作している。『けんかのきもち』（伊藤秀男･絵，2001年），『ぜっこう』（伊藤秀男･絵，2002年），『ありがとうのきもち』（長野ヒデ子･絵，2002年），『ぼくはいかない』（伊藤秀男・絵，2003年），『ともだちがほしいの』（長野ヒデ子・絵，2004），『わたしのくつ』（まるやま　あやこ・絵，2012年）。ここでは，以下の４冊を取上げて検討する。

１）『ぼくはいかない』

絵本『ぼくはいかない』では，はじめてのお泊り保育（キャンプ）に不安を感じ，参加を取りやめた子どもが描かれている。この話は，実際に「りんごの木」であった男の子の実例に基づいて制作されたものである。「ぼく　ひとりで　とまったことなんて　ない。どうしよう……　どうしよう……」「ごめんなさい。ぼくは　いけない…」「ひとりじゃ　だめだ。よる　おかあさんがいないなんて　かんがえただけでも　かなしくなる」。この絵本では，保育者はこうした行きたくない子どもの気持ちに寄り添い，無理やり連れて行かず，子どもが自分の気持ちに向き合って，自分で出した結論を大切にしている。[44]

２）『わたしのくつ』

これは，買ってもらった新品の花柄模様の靴が，「自分の靴」になっていく過程を描いた絵本である。主人公のかおるちゃんは，お母さんにずっと欲しかった靴を買ってもらい，もう嬉しくてたまらない。新しい靴を履いて幼稚園にいったかおるちゃんは，汚れるのを心配して，友達のけいこちゃんに誘われても，くつを抱きしめたたままで，その日は園庭で遊ぼうとしない。その時，担任の先生は「かおるちゃん，それはお母さんが『元気に遊んでね』って買ってくれたんじゃない？　だから，汚れてもいいと思うよ」と言った。この担任の言葉に「りんごの木」代表の柴田愛子は異議を唱える。「これは私の大事なもの」という子どもの気持ちは何日も続くものではないので，一日外で遊ばなくても子どもの今の気持ちを大切にした方がよいと。実際，かおるちゃんはその日は外で遊ばなかった。

次の日も，けいこちゃんの「いっしょにあそぼ！」という誘いに，「どうしようかなぁ…」「やめようかなぁ…」「ちょっとだけ　いこうかなぁ…」と迷いながら，結局，遊ぶのをやめる。だが，徐々に「くつ」が柔らかくなり，かおるちゃんの足にぴったり合ってきた。そして，最後には，「よごれても，すりきれても，だいすきな　はなもうようの　くつ。わたしのくつ」になり，外で遊べるようになった。このように『わたしのくつ』には，子どもの気持ちに寄り添い，子どもの「もの」や「ひと」との出会いは急ぎ過ぎず，もっとじっくり，ゆっくりでいいのではないかという柴田愛子の思いが込められている。[45]

３）『ぜっこう』

この絵本は，「子どもの心に目を向けるように

なってから，心のドラマがよく見えるようになった」柴田愛子が，実際にあったドラマを絵本というかたちにした作品である。[46]『ぜっこう』は，自分勝手なしゅうたろうと１カ月にわたって絶交し，遊ばないと決めたがくが，最後は「ぜっこうをとく」おはなしである。絶交をとくに至ったのは，あいこ先生の子どもの心に寄り添った働きかけがあったからである。あいこ先生に，苦しそうな二人を見て，今日中なんとかしたと思って，一歩踏み込んで，「どうして，がくにぜっこうされてるの」と問うた。すると，しゅんたろうは，「わからないんだ」と泣きそうな顔で答えた。がくが，絶交した理由を挙げると，まわりの子どもたちも，しゅんたろうの，自分勝手な所をいろいろと言った。すると，しゅんたろうは，「もうしないから，ぜっこうをといてほしい」と小さな声でお願いした。でも，どうしても，許せないがくであった。あいこ先生は，「しゅんたろうは，ずっと　つらそうだった。これいじょう　みていられない。ひとが　ひとをゆるせないって，よほどのことだよ」を説得するが，「なんだよ　あいこは　わかっていない。くそー！」。いくら説得して許せないがくであったが，あいこ先生の思いが届いたのか，ついに涙を流しながら「ぜっこうを　とく」と言った。[47]

４）『けんかのきもち』

柴田愛子の代表作と言える『けんかのきもち』は，仲良し男子が喧嘩し，手作り餃子を腹一杯食べるうちに喧嘩の気持ちも収まり仲直りする物語である。

保育者としての彼女の経験から生まれた作品であり，登場人物も本名で書かれている。たいは，一番の友達，こうた君と取組み合いの喧嘩をして負けた。表紙の表情のアップは，負けた悔しさを，涙をためてじっと我慢している，たいの気持ちを見事に伝えている。こうたが，「ごめんな！」と言っても，「なんで，あやまるんだよ！」と思い，けんかの気持ちは終わらない。でも，おやつの餃子をパクパク食べると，涙は止まり，喧嘩の気持ちが終わった。

「りんごの木」では，「けんかを通して動く子どもの心や想い」を見ていて，「けんかはダメ」とは考えていない。仲良しだから喧嘩もするし，喧嘩の後も仲直りができるとした。「りんごの木」では，「けんかは思いのぶつかり合いだから，むやみに止めていません」。[48] しかし，一対一であること，素手であること，どちらかがやる気をなくしたらおしまい，という三つの約束が破られた時は，先生によって喧嘩は止められる。[49] この絵本でもこれらの３つの約束は守られている。あいこ先生は，喧嘩を止めないし，仲直りさせるために直接に働きかけていない。ただ，たいの家の玄関を開けて，「たい，おやつ　いっしょにたべよう。さっき　みんなで　つくった　ぎょうざだよ」とたいを誘うだけであった。[50]

Ⅳ．おわりに

以上，長谷川摂子と柴田愛子の絵本について，その保育者経験という視点から考察してきた。絵本のテーマや素材が身近にあること，子どもの発達や興味を理解していること，子どもの心になれることという点では共通しているが，ふたりには違いが見出せる。すなわち，長谷川が保育士になった一番の動機は，保育よりも生身の人間である幼い子どもへの興味であった。それゆえ，子どもの本領とも言える生命あるものへの関心，好奇心の深さに示される「子どもの内なる自然」に感動した長谷川は，子どもたちにとって身近な自然をテーマにした『みず』『うーらうららはるまつり：くさばなあそびごっこ』などの感覚の喜び，遊びの楽しさを伝える絵本を作っている。また，彼女は，子どもたちとの架け橋となっていた絵本を楽しみという唯一の尺度で選択するとともに，「楽しむ」ことを読み聞かせの極意にして，「おもしろい，楽しい」を基本に絵本を作ったが，『ぐよんやよん』『きょだいなきょだいな』などの彼女の絵本は，子どもたちと一緒に言葉の音やリズムを楽しめるように工夫されている。

他方，柴田愛子は，幼稚園教諭として勤務する中で保育観を確立し，無認可の子どもクラブ「りんごの木」においてその保育観に基づいた保育を自由に

展開してきた。彼女にとって，保育とは，大人の理想を押しつける，「どう育てたい」ではなく，「子ども自身が進みたい道を進めるよう，援助する」子どもを主役にした保育である。こうした保育観に立って，柴田は，子どもたちの自ら成長発達する力を信じ，「子どもの気持ちに寄り添う」ことを基本姿勢にして，その育ちを背後から援助することを心掛けている。彼女は，子どもをじっくり見つめ，子どもの気持ちに寄り添うことを通して，「保育の奥深さ」に気づくとともに，「保育の面白さ」に夢中になった。『ぼくはいかない』『わたしのくつ』『ぜっこう』『けんかのきもち』などの絵本には，こうした彼女の保育観が生かされている。

註

1）村山桂子「子どもといっしょにつくった絵本」『幼児の教育』（日本幼稚園協会）第64巻8号，1965年8月，6頁。
2）長谷川摂子「ふるさとというファンタジー」『母の友』第618号，2004年11月，43頁。
3）長谷川摂子「ほんとうに長いまわり道」『保育の友』第36巻10号，1988年10月，38頁。
4）同上。
5）同上。
6）長谷川摂子『絵本が目をさますとき』福音館書店，2010年．181頁。同上「ほんとうに長いまわり道」
7）長谷川摂子「子どもたちの思い出」『保育の友』第36巻12号，1988年12月，38頁。
8）前掲「ふるさとというファンタジー」44頁。
9）長谷川摂子「昔話と子どもの内なる自然」『図書』（岩波書店）第668号，2004年12月，20頁。
10）『読み語り絵本100』別冊太陽（平凡社）第112号，2000年，100頁。
11）前掲書『絵本が目をさますとき』.
12）長谷川摂子「子どもになめられない保育？」『保育の友』第36巻11号，1988年11月，38頁。
13）同上
14）前掲書『絵本が目をさますとき』
15）長谷川摂子『子どもたちと絵本』福音館書店，1993年，5頁。
16）前掲書『絵本が目をさますとき』
17）「読み聞かせの極意 第6回　絵本作家　長谷川摂子さん㊦」朝日新聞，2001年7月20日（朝刊）。長谷川摂子は，絵本の読み聞かせについて，「子どもたちと私との間で創造的な空間を作ることだ」と思っていた。彼女は次のように説明する。「私が楽しみながら絵本を読むと，そこには私なりの解釈や感情が入ってくる。子どもたちも，自分たちの歓声でそれを受け止める。（中略）つまり，一冊の絵本を巡っていろいろな気持ちが交流しているわけですよね。…自分の思いを人に届けることで，相手からも感じたことや考えたことが返ってくる。感性の交換が喜びをもたらすこと，これこそ『文化』であると思うんですよね」。「突撃レポートしちゃいます　長谷川摂子さん」『この本読んで』2005年秋号（第16号）43頁。
18）『おじいさんがかぶをうえました』（月刊）絵本「こどものとも」50年の歩み），福音館書店，2006年，129頁。
19）前掲書『絵本が目をさますとき』105-106頁。
20）「読み聞かせの極意 第5回　絵本作家　長谷川摂子さん㊤」朝日新聞，2001年7月20日（朝刊）
21）前掲書『絵本が目をさますとき』107-108頁。
22）長谷川摂子「絵本が目をさますとき連載第12回絵本の読み方のコツはある？」『母の友』2001年3月，第574号，57頁。
23）前掲書『絵本が目をさますとき』102頁。
24）「きょだいなきょだいな」（長谷川摂子「作者のことば　底抜けにめちゃくちゃに」「絵本のたのしみ」こどものとも第386号折り込みふろく，1988年5月。
25）『ひらひら　ころころ　あきまつり－くさばなおもせやさんごっこ』（月刊かがくのとも，第318号，折り込みふろく　かがくのともタイムス，1995年9月）
26）長谷川摂子「科学絵本の持つ力」『母の友』第633号，2006年2月，74頁。
27）同上，69頁。

28）同上。
29）前掲書『子どもたちと絵本』193頁。なお，長谷川摂子は『みず』と同じような趣旨で，英伸三の写真による科学絵本『じめん』（かがくのとも第176号，1983年11月か）『どろんこ』（かがくのとも第208号, 1986年７月）を作っている。
30）前掲「折り込みふろく　かがくのともタイムス」
31）無著名「育てる人第一回柴田愛子さん」『母の友』第734号，2014年７月，52頁。
32）同上，54頁。
33）同上，55-56頁。
34）同上，59頁。
35）柴田愛子『りんごの木のびのび保育ブック』すずき出版，2006年，２頁。
36）柴田愛子『こどものみかた　春夏秋冬』福音館書店，2016年，185頁。
37）同上，119頁。
38）前掲「育てる人第一回柴田愛子さん」56頁。
39）同上。
40）柴田愛子『それって，保育の常識ですか？』すずき出版，2015年，166頁。
41）柴田愛子『保護者とのつきあい方50のコツ！』学陽書房，2007年，16-17頁。
42）前掲「育てる人第一回柴田愛子さん」56頁。
43）同上。
44）前掲書『それって, 保育の常識ですか？』141頁。
45）「子どもの心により添う～子どもは自ら育つ力を持っている～」マッセOsaka編『セミナー講演集』第32巻，2014年，大阪府市町村職員研修研究センター，141頁。
46）同上，138頁。
47）柴田愛子『子どもたちのミーティング』りんごの木，2015年，146-147頁。
48）前掲書『こどものみかた春夏秋冬』76頁。
49）前掲書『それって，保育の常識ですか？』36-37頁。
50）伊藤秀男「けんかのきもち」『ユリイカ』第34巻３号，2002年，130-131頁.

謝辞

本研究内容は，四国大学附属学際融合研究所での研究活動として得られたものである。ここに深くお礼申し上げます。

ABSTRACT

This Article aims to clarify how Hasegawa Setsuko and Shibata Aiko create picture books by utilizing experiences as a child care workers. As a result of the study, the followings were clarified.

Taking interest in children rather than child care, Setsuko Hasegawa became a child care worker. She was so deeply impressed with “nature within child” that she created picture books on the theme of such familiar natures as water and flower. She also published picture books with sounds and rhythm that enjoyed children. Aiko Shibata opposed the child care that imposed ideals of an adult, and practiced the child-centered education. She believed children’s self-development and tried to stay considerate of their feelings. Her picture books are strongly reflected by her view of education.

KEYWORDS: Setsuko Hasegawa, Aiko Shibata, picture book, child care worker, reading aloud.